

沢村貞子著「わたしの三面鏡」朝日文庫、朝日新聞社 1986 年 6 月 20 日刊を読む

ありがたや

1. 私の一日は朝ぶろにはいることから始まる。生まれつきの低血圧で寝起きが悪く、ちょっと熱めのお湯につかっていると、やっと目がさめる。血めぐりがよくなるせいで、その日のテレビの台詞から晩ご飯の献立、さては通いの家政婦さんに頼む買い物メモまで次々に浮かんでくるから、朝湯のひとつきはありがたい。
2. それでも、時折、小原庄助さんの唄をふと思い出す。私の朝寝の方ではないし、お酒は一滴ものめない。つぶすほどの身上もないからいいけれど、怠けものの代表のような庄助さんと同じように朝湯にはいつていることが、今日さまに申し訳なくて気がひけるのである。そして「こんなぜいたくをさせてもらっているのかしら」と心の中で、だれにともなくあやまったあと、またしても「ありがたや、ありがたや」とつぶやく。これは以前、わが家で働いてくれた家政婦Mさんの口癖の影響である。
3. ご主人が亡くなったあと、勤めていた清掃会社を退職してわが家へ来たのは、たしか 15 年ほど前。それから 5 年間、小柄な身体をまめに動かしてせさせと働いてくれた。東北の小さな村の小学校を出ると、すぐ上京して家事労働をしていたせいか、毎日の台所仕事は行き届いて気持ちがよかった。しかもうれしかったのは、何かにつけてもの喜びする、心のしなやかさだった。私より 5 歳上だったから、力仕事などしないですむように気をつけたが、そのたびごとに、「ありがとうございます。気をつかっていただいて……」と繰り返した。ポツと赤みのさした両頬をほころばして言う、その言葉の真実味が、こちらへ温かく伝わってきたものだった。
4. Mさんの生涯がどんなものだったか、私はくわしく聞いたことはなかったが、カナダ在住の邦人漁民のもとへ、写真花嫁として嫁いだことは、ある日ふと話してくれた。苦労を重ねたあげく、夫と死別。三人の子を連れて帰国したが——その後、めぐりあった再婚の相手にも先立たれてしまった、という。
「いい人でね、とてもやさしくしてくれたから……しあわせでした」
番茶をすすりながら、昔を思い出して微笑んでいたMさんの表情には、今の暮らしに満足している老女のおだやかさがあつた。
5. その後添いの人との間に生まれた子供は生来虚弱で、いつまでたってもひとり立ち出来ないらしい。それでも「私だけこんな苦労を……」と愚痴ひとつこぼさないところは、しっかり者の感じがしたが——格別、歯を食いしばって耐えている、という悲壮感はなかった。ときにはこちらが慰め

られるような、あのやわらかさは一体どこからきたものかしら。この人は、福分——もって生まれた自分の好運の量を見さだめて、素直に生きてきたのだろう、と思う。

6. 心臓発作を起こしてわが家をやめてから3年間……亡くなるまで、仕立てものなど届けに来てくれたが、その間、ただの一度も甘ったれたこともなく、たまに好物のお惣菜^{そうざい}などおすそ分けしたりすると、

「まあまあ、ありがとうございます……」

と心底うれしそうに喜んでくれた。

7. Mさんは、生来足りることを知った、しあわせな人だった。

〈サ、これで今日も元気で働ける〉私は口の中で、〈ありがたや、ありがたや〉とつぶやきながら、今朝もゆっくり、浴室を出た。

P135 ~ 138

<コメント>

女優 沢村貞子さんの本を4冊紹介します。

— 2016年7月22日(金) 林 明夫記 —